

広葉樹育成の今日的課題

渡 辺 啓 吾

最近目にふれた記事を拾い、おわりに小私見を記した。最近欧州を回った村上木材貿易部長永田清氏は「家具の主流はナラである。日本ナラがどれ位使われるか、ベルギーがいま道産インチ材の一番の得意先だが、年間のナラ輸入は80万石、うちフランスナラ48%、アメリカナラ25%、日本ナラ5%である。世界の銘木と自負してやっているが、この数字からあまり大きな顔も出来ないとの感じをうけてきた。アメリカナラがヨーロッパに大きく進出して定着しつつある。」新旭川常務山崎梅吉氏は「欧州で使われているナラの総量は160万から170万石で、うち日本から輸出されるのは9%、だから価格次第では全量輸出も不可能でない。日本ナラに匹敵するものはフランスナラといわれ、よいものは相当高い。アメリカナラも白系のよいものは需要が多く三月までは供給できない。赤系ナラもよいものは不足気味という。」国内の静清市場について村沢木材社長村沢清氏は「北海道広葉樹材は清水港と大井川港と合せて約1万m³産地からのトラック入荷5千m³で合計1.5万m³。センが主体で、タモ、キハダ、ニレ、特殊ケースとしてシウリ、一時はめしのたねだったハンは影をひそめている。やはり外材にはない木目のある樹種が定着して微増傾向にある。」(「北海道産広葉樹全国懇談会」53.10.6北海道林材新聞)

北海道産広葉樹関西連合会会長岡田勝利氏は「アメリカのホワイトオークは外見だけみると木の姿はいいですが、製品にするとなんか欠点が出るんです。北海道のナラは家具にした場合は重厚な感じというか、やはりいいもんです。北海道材のPRを東京、大阪の三越でやって、昭和48年くらいからナラの家具としての価値を一般に認められた。家具としては最高のものはナラです。ナラで最高のものは北海道材ということです。北海道林材新聞の場崎さんが、年一回の全国大会でかならず一席ぶつんですが、その時に北海道材は世界に冠たる広葉樹だということはずいぶん言ってました。その当時、ぼくらなんか空々しい気持で聞いてったんですが、今になってみて初めて、広葉樹としておそらく北海道材に優る広葉樹は世界にないと、はっきりそれを確認するようになりました。ちょっと手遅れですが。」(53.12.21林業新聞)

昨年もハワイやサンフランシスコなどで道産材家具を含めた展示会が行われ、それらの高級家具の輸出も順調のようである。しかし一方には昨年12月アメリカから米産広葉樹の売込みに代表者が来旭している。フランスナラやアメリカナラの家具が日本で流行することがあるかもしれない。北海道の広葉樹の価値はしばらく発見または発揮されなかった。開拓時代にはナラは邪魔者であり野に積まれ焼かれた。戦時の閉鎖経済のなかでは薪炭枕木の役を荷った。自由経済のなかで高級家具材として最高の扱いを受けた。

広葉樹の育成面についてはどうか。道産広葉樹協議会会長高橋丑太郎氏は「道の林政は針葉

樹にあけ針葉樹にくれたといっても過言でない。山の状態も半々，広葉樹も基幹産業の中の重要なウェートを特つので，今後広葉樹にも行政の一層の力を貸してほしい。もう一つ造林はほとんど針葉樹で広葉樹は片手落ち的見方も外部からはとれよう。行政としてもおおいに有用広葉樹の育成に努力願いたい。」(前出全国懇談会)

道林務部では昭和45年に「北海道の広葉樹育成について」シンポジウムを開き，広葉樹の保護，育成や施業法に対する関心をうながした。林野庁主催の昭和48年発足の第一回林業技術開発推進北海道ブロック協議会では「天然生広葉樹林の施業法」が重要議案として協議され，試験機関を中心とする研究会がもたれ，その活動成果が50年に報告された。この報告では現段階において分かっていることと，分らないことを区分し，分らないことのうち比較的容易に対応出来るものについて，その対応策を示している。分かっていることがらとしては，壮齢広葉樹林(50~100年)では，(1)所在，地林況，林分構造(2)除間伐計画と選木方針(3)洗駆樹種と支配樹種の区分(4)間伐による光量増加財に対する樹種の反応度(5)除間伐開始時の判定。高齢広葉樹林(100年以上)では，単木的に所在が記録されている。

まだ分っていないことがらとしては，壮齢広葉樹林では，(1)現在のような分布の理由(2)除間伐をする場合の伐採本数の基準(広葉樹の収穫表はほとんどない)，(3)上層木の枯損原因(4)除間伐による効果測定(5)群ごとの枯れの原因(6)将来計画への不安(経営として成り立つのか。針葉樹を樹下植栽した場合，将来の広葉樹生産はどうなるか)。幼齢広葉樹林(50年以下)では分かっていることは全くないといってよい。(1)造林地に侵入する広葉樹の法則性(2)異樹種間の競合はいつからどんな形で始まるのか(3)浸大木を除去する時期(4)造林木を侵大木と両立させる方法があるのか。高齢人工林では，地域別に樹種毎に利用材積がどの位あるのか。

第13回林木育種現地研究会では「広葉樹林施業と育種」のテーマで討議が行われた。(「北海道の林木育種」1975)。旭川営林局から(1)どうして形質のよい広葉樹が生成されるのか(2)広葉樹の純林的な林分は環境によるものか，遺伝的な要素があるのか，その生成原因の究明(3)広葉樹造林は単純林でよいのか，また施業方法を遺伝的に管理するにはどのような手法がとられるべきか，などが提起された。林試北海道支場では，広葉樹の育種にあたり次の四点についてしらべたいとのべた。(1)種類としての特徴を明らかにする(2)聴の種類とのかかわりあい(3)水平的垂直的分布における変異の解明(4)林の再生産能力を低めることなく，遺伝変異を小さくしない手だてを明確にする。

北海道森林の長年の研究者はこういう。元林試北海道支場長余語昌資氏は「下からはえてくるものは大部分は広葉樹であって，北海道の大部分は広葉樹になって安定するのではないかと考えている。北海道では亜寒帯の針葉樹林というのは，どうも信用しがたい。」(「林」1978,9)同じく元支場長柳沢聡推氏も「多数の樹種が混在する混交広葉樹林やさらに針葉樹をも含んだ針広混交林については，構成樹種の生理，生態的特性と群落としての構成と遷移についての解明は施業の基盤となるべきもので，調査研究を大いに推進してもらいたい。つぎに広葉樹林の

施業区分の確立と施業基準の作成が当面必要であろう。優良材生産，普通材生産および公益的機能向上の三施業地に大別できる。長期の目標，対策がなければ広葉樹林問題は容易に解決されない。」(1978，11「森林計画研究会報」)

道産材輸出関連国の広葉樹の育成状況はどうか。身近の冊子を散見するとかなり研究も実行も進んでいるようだ。フランスでは広葉樹林が7割強を占め，蓄積ではナラ 35%，ブナ 15%を占め，ナラ，ブナの高林作業はフランス林業の花形となっている。ナラは高品質材（薄板用の第一級の用材）のかなりの割合を生産している。ブナもロータリによる製板，剥皮の良質材を生産している。これらの生産のためには間伐の繰り返しと傘伐による更新（天然あるいは人工林補助）を伴う長伐期の同齢高林の施策を行っている。有名なアルガン材積表にうかがえるようにフランスの林業，林学は自然主義的・経験主義的・現実的な色彩が濃厚だという。（北村昌美「欧米各国における森林作業法の最近の動向」1978，大隅真一「フランス林業に学ぶもの」1958，いずれも日林協発行）

アメリカ政府発行の「アメリカ合衆国の森林樹木の造林特性」によれば，ナラ類 21 種について 310(1960 以前)の文献があげられている。ちなみに「林業技術者のための文献解題」(1977，'78 北方林業会)の造林編，経営編を合せ 773 題(1976 以前)のうちナラ類に関するものは数題にすぎない。

ドイツの「森林雑誌」の 1974，9 に貴重広葉樹材の特集がある。ドイツでその対象としているものはナラとブナを除いた自国産樹種と帰化樹種で，家具や家屋内装などの高級な用途に使われるもので，タモ・カエデ・クルミ・ニレ・サクラ・カバ・ナナカマド・ナシ・クリ・ニセアカシアなどがあげられ，生育環境によって山のもの野のものなどに区別され，造林もされているようである。

北欧では研究と実業が一体といわれ木材資源は徹底的に利用され，家具用，枕木用を除いた小径低質材からフローリングを製造し，樹皮，かんな屑，のこ屑，小片まで余すところがないという。

北海道にもどって考えると，まず利用面の高次開発が第一と思う。ナラ・カバ・セン・タモなどの世界の銘木がインチ材や合板になって欧米に向けて年間 200 億円ほど輸出されているがさらにこれらの高次加工品の輸出と国内流通が望まれる。最近 5 ケ年間（昭和 48 年～52 年）の道産広葉樹のパルプ用材量はおよそ 1,300 万 m³であるが，これらの多くは若齢二次林からのものであり，将来の貴重材になりうる巨大な量が，雑木といった慣習的思考のもとにくくられて真価を發揮せず失われているように思える。自由経済のなかでこそ北海道の広葉樹はその真価を發揮するであろう。林業人の努力により，より高価に売れて育林意欲がわくようになることを期待したい。その際道立試験機関が系統だてて実用的な利用と育成の開発研究を蓄積していかなばならぬことはいうまでもない。また国際銘柄をもつ北海道が，輸出関連国における広葉樹の利用と育成の事情を知ることは，自由経済下にあってはとくに必要であろう。（場長）